鎮魂

――小説阿佐谷六丁目

佐々木基一

講談社

鎮魂——小説阿佐谷六丁目

一九八〇年五月十五日　第一刷発行

著　者　佐々木基一
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五—一一一一(大代表)　振替東京八—三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定　価　一三〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえします。

© Kiichi Sasaki 1980, Printed in Japan

0093-168609-2253 (0)　(文1)

目次

1 再会 5
2 来訪者名簿 21
3 冠婚葬祭 35
4 衣食住 51
5 若い獅子たち 72
6 「方舟」騒動 97
7 光と翳 120
8 細胞解散 140
9 奇妙な家族 178

装幀　辻村益朗

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

鎮魂

——小説阿佐谷六丁目

1　再会

わたしが阿佐谷六丁目に住んだのは、一九四五年の暮から一九五一年の初夏まで、まる五年半ばかりの間だった。ちょうど敗戦の年の暮から、戦後の典型的な荒廃と混乱の時期である。毎日毎日が、いままで体験したこともない、新しい出来事の連続であったが、同時に零から出直すような、不思議にカラッとした、はじけるような生気が感じられる時代でもあった。

そのためか、思い出の中のこの五年半という時間が、わたしにはかなり長く感じられる。ちょうど、少年から青年へと成長する時期の時間が、成人に達して以後の時間にくらべて、ずっと長く感じられるのと似ている。わたしが阿佐谷から現在の久我山に移ったのは一九五一年のことで、それ以来今日まで数えてみるとすでに二十七年の歳月が経っている。しかし、ふりかえってみると、敗戦後の五年間にくらべて、それ以降の二十七年は、まったくアッという間に過ぎ去っ

たような気がする。いわゆる戦後は終った、という声があがりはじめた時期から以後の時間の進み方は、少くともわたし個人にとっては、きわめて迅かった。必ずしも毎日毎日が同じ日の繰返しにすぎなかったとはいえまいが、わたしの魂の上に、新しい体験として刻印されるようなものは何もなかったといっていいようである。はじめて出かけて行った外国旅行と、一年ばかり滞在した外国の街での生活を除いて、わたしの生活にはもはや何一つはじまりと呼ぶに値する体験がなかった。わたしは住宅金融公庫の金を借りて自分の家を建てたし、乏しいながらも、ともかく家内と二人で家庭生活らしきものを営んでいた。日本共産党のはじめた火焔壜闘争も、所感派と国際派への分裂も、スターリン批判も、また三十年代にはじまった日本経済の高度成長も、六〇年の安保デモも、学園紛争の嵐も、中国の文化大革命も、ソヴェト軍などのチェコ進駐も、ヴェトナム戦争も、アメリカのアジアからの後退も、水爆実験も、成田闘争も、そういうわたしの個人生活を根柢から揺り動かすことはなかった。どこで何が起ろうと、わたしの日常生活は、ともかく坦々と続いて絶えることがなかったのである。生活は一直線にと云おうか、ジグザグの線を描いてと云おうか、どちらにしてもさして違いはないが、とにかく終りの方向へむかって下降してきただけのように思われる。

久我山に移り住んで以来、わたしは一度も阿佐谷のむかし住んでいた界隈に行ったことがないように思う。いや、ひょっとしたら一度くらいは行ったかもしれないが、正確な記憶はない。つ

まり訪ねるべき格別の用事がなかったからであるが、家のあった場所が駅から遠く離れていたことも一つの理由だったろう。

その場所というのは、阿佐谷北のいまでは早稲田通りと呼ばれているが、当時は大場通りと呼ばれていたバス通りから、さらに北に向ってしばらく行ったところである。その先の細い十字路が、杉並区と中野区の境になっていた。阿佐谷側の高台がそこで尽きて、その先には鷺宮に向って田圃が展けている。大場通りから入ってすぐ右側に広い畑があり、畑の向うの一画が生垣をめぐらした住宅地になっていた。その一画の露地を右に入ったところに、わたしたちの住んだ家があった。板戸の門の内に小さな庭があり、梅の木や八つ手などが植っていた。家は二畳の玄関に、床の間、廊下つきの六畳間と、奥の東側に四畳半、便所に行く廊下を挟んで西側が台所と風呂場になっていた。風呂場には風呂桶がなかった。たとえあったとしても燃料不足の時代だから、自宅で風呂をたてることなどとてもできなかったろう。

阿佐ケ谷駅へ出るのも、西武線鷺の宮駅へ出るのも、高円寺駅へ出るのも、距離はあまり違わなかった。ゆっくり歩いて二十分か二十五分かかった。敗戦直後の栄養不良の体で、駅までのその長い距離を歩くのはけっして楽ではなかった。鉛のように重い足を引きずって歩いていると、次第に息が切れてきた。

それでも、戦災を受けた東京の一角に、そういう独立家屋を一軒借りることができたのは、大

へんな幸運といわねばならなかった。東北の疎開先を焼け出されて、行き場のなかったわたしに助けの手をさしのべてくれたのは、かねてから懇意にしていた歌人K女史夫妻だった。K女史夫妻もまた小石川の住宅地にあった家を焼かれていたが、以前に借りていた阿佐谷の家が空いているからと云って、しばらくのあいだ入居を許してくれたのである。K女史夫妻は荻窪の知人の大きな邸宅に身を寄せていた。阿佐谷の家は狭すぎて使いものにならないらしかった。K女史も、戦後、世間に名の知れた会社の社長をしていた女史の夫君もともに世を去ったのち、阿佐谷のあの小さな家には、むかしK女史の夫君のお妾さんが住んでいたらしいという噂をわたしはどこかで耳にした。しかし、いまもって真偽のほどはわからない。

畳表がかなり傷んで、ささくれだっていたが、ほかにはどこといって異状がなかった。かなりしっかりした建物で、これも後になってわかったことだが、家主は高円寺に住む布団屋さんだった。小柄な、いかにも職人といった感じの布団屋の主人は、魚釣りを唯一つの道楽としていて、どこかの釣会の会長をしているということだった。わたしの住んだ家の裏に二階建ての倉庫があって、そこに布や綿など布団の材料がしこたま仕舞われている様子だった。家賃は月五十円だった。戦後のインフレが激しくなり、円の値打ちがどんどん下っても、家主は一文も家賃を上げなかった。肩身の狭い思いがするので、こちらから上げてくれとたのんでも、頑として承知しなかった。商人にしては珍らしいこともあるものだと思っていると、しばらくして、布団屋と戦前か

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

ら懇意な隣の奥さんがそのわけを教えてくれた。家主の方では、いずれ嫁をもたせねばならぬ養子のために、なるべく早く家を返してもらいたいと望んでいる。家賃を上げると、契約更新になって、居坐られるのを恐れているのだということだった。なるほどそういえば、自分たちで費用をもつから、ガスを引かしてほしいとたのんだとき、頑としてきき入れなかったのも、同じ理由からだったにちがいない。

そんなわけで、その家に住んでいた五年間、わたしたちはいつも、ほんの一時の腰掛けみたいな、不安定な気分で暮していた。

わたしは去年の秋、それこそ本当に久しぶりに、阿佐谷六丁目界隈を訪ねてみた。わざわざ出向いたわけではない。いまは阿佐谷北と町名の変っている阿佐谷六丁目から少しばかり北に寄った、中野区若宮という町に住む友人Yの長男が結婚することになったというので、家内と二人お祝いをもって行った。その帰りに、ふと思い立って、むかしの家のあたりを歩いてみたのである。敗戦直後にYはわたしたちの近くの、建物を強制疎開した跡の空地に作られた、都営の簡易住宅に住んでいた。ルーフィングで屋根を覆っただけのバラックに等しい長屋であったが、当時はそういう住いにすら入れる人は仕合せだったのである。復員して間もなく結婚したYの細君は、まだ女学生の匂いの抜けやらぬ、若くて可愛いい女性だった。あの可愛いいYの細君も、すでに息子が結婚する年頃になり、やがて間もなくお祖母さんと呼ばれるようになるのかと思う

と、いまさらのように過ぎ去った戦後の時間の迅さを感じないわけにはいかなかった。Yもすでに停年で、論説員をしていた新聞社の第一線から退いていた。

Yの家を出て、若宮小学校の前に出ると、すぐ下に川が流れている。セメント・ブロックで護岸工事を施した川床はかなり深くて、一段低い川向うにある団地の地面からもかなり深く落ちこんでいる。これがむかし、田圃のほとりの叢の中を流れていた妙正寺川かと思われるほどの変りようである。すでにあたりに夕闇が漂いはじめていた。わたしはふと、むかしYの家を訪ねた帰り途、若宮小学校のガランとした校庭から、田圃の向うにみえる農家の大きな欅の梢に落ちる夕陽を眺めたことを思い出した。

「このへんを、よく歩いたものだな」

「川では子供が魚をとって遊んでいたり、夏の夕方には螢が飛んでいましたね」

そんな言葉を交しながら、わたしたちはコンクリートの橋を渡った。そこらあたりはすっかり小さな店舗で埋まっていて、まちがいなく阿佐谷六丁目へ出る道かどうか、すぐには見きわめがつかなかった。ゆっくりと足を運びながら、わたしは云った。

「Y君たちも年をとったものだな。いつの間にか息子が結婚する年頃になって……」

「いつまでも若いと思っていたYさんも、やっぱり、年には勝てないのね。Yさんがむかし、家にきて酒飲みながら、奥さん、あと五年待って下さい、あと五年したら日本はすっかり変ります

よ、あと五年、あと五年……としきりに力んでいた姿が、いまでも眼にうかぶようだわ」
「ああ、覚えている。あれは昭和二十三年か二十四年頃だったかな。民主革命、革命ってあなたがたはおっしゃるけど、世の中は一向に変らないじゃありませんか、と云って、あんたがぼくたち男性をからかったんだ」
「あの頃は、みんな若くて、元気がよかったわね……予言はちっとも当らなかったけれど」
「金はないけれど、意気だけは軒昂としていたな」
「あなたがたの雑誌だってそうでしょう。あの雑誌で、悠々みんなが食べて行けるようになる筈じゃなかったんですか……」
「まあ、そうならなくて、かえってよかったのかもしれないさ。ものは考えようだ」
とりとめのない思い出ばなしをしながら、しばらく南にむかって歩いて行くと、道がだらだらと上りになった。何となくむかしの匂いが漂ってくるような気がしはじめたとたん、左側に医院の白い看板が眼についた。医院の名がむかしと同じだ。もはや疑う余地はなかった。すると、この医院の北隣りの門構えの家が、敗戦直後まで、佐多稲子さん一家の住いだったところだ。時折佐多さんがその坂を上って、大場通りにある風呂屋に通う姿を、わたしはみかけたものだ。艶々した長い豊かな髪が印象的だった。しかし、佐多さんは間もなくその家を引き払って小平の方へ越して行った。

医院の隣りに、道路に面した土蔵がある。この土蔵にも見憶えがあった。
「ここが例の質屋だったな」
「看板も、のれんもないじゃない。商売止したのかしら、それとも代変りしたのかしら」
表札をみたが、むかしの姓名はどうしても思い起せなかった。〝例の〟とわたしが云ったのは、あの頃、お客があると、家内が裏口から、そっと衣類の包みをかかえてこの質屋へ持って行ったものだからである。家内はその金をもって大場通りにある酒屋から酒を買ってくる。おかげで、酒屋の常得意になったけれども、あそこへ行けば酒が飲めるというわけで、自分を訪ねてきた友達も一緒に連れて、わたしの家にやってくる若い文学志望者もいた。
質屋の先は十字路である。そこを越えると杉並区だ。左の角には見憶えのある家が残っている。総二階のかなり古ぼけた家で、いまもむかしと同じく会社の寮の看板が門にかかっている。しかし、敗戦直後のあの頃には、会社員らしいものは誰も泊っていないで、管理人として収っているみたいな三十代の大工と、その細君と二人の子供が住んでいるだけだった。大工一家の住んでいる階下の部屋はガランとして、ちゃぶ台のほかに家具らしい家具はなく、破れた畳も取り替えられず、或る部屋には畳の代りに莫蓙が敷いてあったりした。大工の細君は顔色どす黒く、唇は紫で、歯齦もまた暗紫色の、たちの悪い病気を連想させる色をしていた。しかし、しょっちゅう大きな腹をしていて、着物の前をはだけただらしない恰好で、足を引きずりながら、けだるそ

うに歩いていた。この細君はかつて新宿の遊女だったのを、大工が身請けしたとかで、それにしては珍らしくすでに二人の子供を生んでいたが、さらに次々と新しい子供を生んだ。結局わたしたちが阿佐谷にいるあいだに四人の子持ちになっていた。ただでさえ生きて行くのが困難だった敗戦直後の時代に、四人の子供をかかえての生活は並大抵ではなかったらしく、履物を買ってやる金もないのか、子供たちはいつも跣で、土埃りの立つ道の上を走り回っていた。最初は五歳くらいの男の子と、三歳か四歳の女の子の二人だったが、着るものも満足に与えられず、いつも裸同然の姿をしていた。配給の食糧だけではとても足りそうになかった。あの一家はいったい何を食べて生きているのだろうと思ったりしたが、主食品を割いてやるだけの余裕はこちらにもなかった。亭主は無口なおとなしい男で、時々ひとりで酒を飲んでいた。細君はじつに気のいい女で、どういうわけだかわたしの家内と気が合うらしく、時に亭主が酒を飲むことをこぼしたり、廓に出ている頃には、毎日十五人も客をとっていたなどと、打明け話をしたりした。

この家の隣りにはむかしWという姓の一家が住んでいた。わたしに家を提供してくれたK女史と縁つづきに当るらしいことを、のちにわたしは知ったが、とくに深いつきあいはしなかった。しかし、いまはその家の表札も別の姓に変り、家の表側は改装されている。その隣りは、わたしたちがその一家といちばん親しくつきあったTさんの家である。しかし、大黒柱となって家を支えていた奥さんが、わたしたちがまだいるあいだにくも膜下出血に倒れて亡くなると、たちまち

一家は離散してしまった。いまはむかしの家も建て替えられて、産婦人科の医院になっている。その角を左に入った露地の北側にわたしたちの住んでいた家があった。露地を入ってみると、むかしの家の場所には、新しい、モルタル塗りの二階家が建っていた。かなり広く感じられる家で、あの狭い土地にも、これだけの家が建つのかとびっくりした。

「うーん……、立派な家が建ってるじゃないか」

わたしは思わず溜息をついた。ほかには何も云うべきことが見当らなかった。

「サラリーマンの家のようだね」

「おそらく、そうでしょうね」

家内もそう云ったきり、口をつぐんだ。

「おや、お隣りはむかし通りAさんの家だわ」

露地を先に歩いていた家内が隣の表札をみつけて云った。生垣の東側にAさんの家の広い庭があって、薔薇やその他の草花がたくさん植えられていたことをわたしは思い出した。銀行員の主人は小柄な風采の上らぬ中年男だったが、細君はちょっとした美人で、きかん気が強く、主人の母との間がうまく行っていないらしいと噂されていた。Aさんの家の生垣に沿って左に曲がると、そこにもまた同じ姓の表札をつけた別棟があり、さらに奥の方に、もう二軒ほど別の姓の家があった。広い敷地内が四軒の家に分割されたわけである。声をかけてみようかという気持ちに

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo